

JIRON KOHON II

政治家も、メディアも、国民も「劣化」

「おとな社会」の危機と「子ども社会」の蔓延

ジャーナリスト

三木寛郎

日本文化と子供じみた論理

子供は喧嘩をする。つまらないことが原因で、売り言葉に買い言葉が応酬され、果ては取っ組み合いの喧嘩となる。これを大人がやると、多くの場合「おとなげない」と揶揄される。ところが昨今、この「おとなげない」喧嘩をちよくちよく見かける。街中で、駅で、飲み屋の店先で、果ては高速道路の路上で車を止めてまで「おとなげない」喧嘩が繰り返されている。多くの場合、ほとんどの人が、つまらない喧嘩をするものだとして一笑に付す。

なぜ喧嘩が始まるのか。感情的になるからである。理性が感情を制御できれば、基本的に喧嘩は始まらない。賢者とは喧嘩をしない人のことであろう。議論と口喧嘩は違う。まして手を出すなどもの外である。分かっているのだが、時として感情

を抑え込むだけの理性を持ち合わせない愚者たる筆者などは、遣らずもがなの口論に巻き込まれたりするから困ったものである。

集団や企業、大きくは国といった組織を牽引する人物に求められるのは、この「おとなげない」である。頭脳と知恵を駆使して、冷静な判断を下し、つき従う集団をよりよい方向に導いていくことが求められるのだ。

ところが、往々にして「おとなげない」リーダーが登場する。例えば北朝鮮の最高指導者である金正恩氏と、売り言葉に買い言葉を繰り返す米国の大統領ドナルド・ジョン・トランプ氏。

双方とも、もう少し理性的に対応できないものかと思うが、なかなかそうはいかないものようだ。

翻つて、我が国の指導者を見ると、どうも心もとない。街頭演説でヤジを飛ばす群衆を指さし「こんな人た

ち」と言い放つてみたり、国会の答弁中にしつこい追及をされた時などに、かなり感情的になったりする場面は少なくない。

しかし、そうした醜態を取り上げるメディアにも「おとなげない」風潮は見え隠れする。とにかく面白おかしく記事を構築せんがために、理性や品格とは程遠い視点や論点が横行してはいないだろうか。国会議員の不倫報道などその最たるもので、大して魅力的でもセクシーでもない代議士が、誰とどこで何をしようが、放っておけばよいと思うのは間違いだろうか。

知り合いに岩手県出身の小山一芳というカメラマンがいる。彼が東関東大震災の被災地に向いて撮影して来る写真は、どれも笑顔ばかりだった。小山氏いわく、悲しい写真、悲惨な写真というのは基本的に隠し撮りなのだそうで、どんなに悲しい状況や

悲惨な状況にあつても、被災者の方たちにレンズを向け、撮りますと宣言すると、笑顔が返ってくるのだという。

報道とは、真実を伝えることであるが、同時にそこに登場する人や物に対する「おとなげない」な目線も大切なのだ。

米大統領の不正を暴いたウォーターゲート事件と、一連の興味本位な代議士の不倫報道は、ジャーナリズムの質が本質的に違うものであることを認識すべきである。

安倍首相が国会答弁に際して原稿にあつた「云々（うんぬん）」を「でんでん」と読み違えて騒がれたことがあつたが、これもその質問内容よりも安倍総理の漢字読解能力にメディアの目線は集中し、蓮舫氏と安倍総理の質疑応答の内容はどこかに置き忘れられたままである。

どうやら我が国は「おとな社会」



安倍首相もメディアも「付度」の真の意味を理解しているか疑わしい

を逸脱して「こども社会」へと後退してしまつたように見える。

付度は日本固有の文化である

さて、その安倍総理は国会において学校法人「森友学園」や「加計学園」の問題について追及を受け、「今後も求められれば、丁寧に説明をして行きたい」と述べたはずだが、9月28日、臨時国会の冒頭にお手盛りともいえる衆議院の解散に踏み切つた。

事の起りは「森友学園」の前理事長の籠池泰典氏の「付度（そんたく）」発言であつた。今や流行語となり、今年の流行語大賞にノミネートされそうな勢いだが、安倍総理もメディアも、この「付度」という言葉を正しく理解していないままにこゝとが推移してしまつたように見える。

辞書を引けば簡単に分かることだが、「付度」とは日本独特の文化とも言える所作で、単に「他人の心を推し量る」という意味であり、あくまでもその上で何か行動を伴うことを示す言葉ではないはずである。

だとすれば、安倍総理が「付度」の意味を正しく理解していれば、付度があつたかなかつたかは付度する側の勝手であり、一切与り知らない、関与していないことであることをはっきりと認めてしまえば済む話だったのである。それを、何がしかの働きかけがあつた、あるいは配慮を強要したような意味での報道内容が横行して、付度自体が悪しきことのように位置づけられてしまつたきらいがあるのだ。

「付度」とは、一切相手におもねることなく、相手の心情を慮ることであり、それは「おとな社会」にお

ける一種の流儀であるはずだ。

知識と知恵の足りないマスコミが「付度」の意味を曲解し、あたかも行政サイドが政権におもねることを意味するような報道を行つたために、せつかくの「おとな社会」における美しき日本文化が、けがされてしまつたような印象を受ける。

ちなみに、「付度」について英語を理解する外国人数人に説明してみたが、英国人も米国人もニュージーランド人も、そして中国人も全く理解できなかった。頼みたいことがあるなら言葉にして伝えるべきである。頼まれもしないのに余計なことほしない、というのが共通の見解であり、一切のコミュニケーションを抜きに付度することはあり得ないという答えが返つて来た。

どうやら「付度」とは、日本独自の文化の一つであり、「おとな」同士の人間関係において成立する言葉なのだ。マスコミのみならず、国会の議場においても、こうした正しい日本語の知識と活用をこ理解いただき、より「おとな」な議論を拝聴したいと思う。

残念ながら「こども社会」の潮流は、

日本の国会やマスコミのみならず世界中に拡大しているようで、冒頭の北朝鮮の金正恩氏と米国のトランプ大統領の、売り言葉と買い言葉の応酬しかりで、世界に「こども社会」が蔓延しつつあるように思える。

一国の指導者が理性を忘れて「こども」的な感覚で感情的な発言を繰り返すことで、結果的に喧嘩が起きるとすれば、それが戦争という愚かな行為につながるっていくのである。

元来「おとな社会」の美德を重んじて来た日本という国の伝統を考えると、現代の我が国のリーダーたちやメディアの方達が、世界の「こども社会」化の風潮に流されることなく、日本人ならではの文化を背景に持つて、世界における指導的な立場を果たすことができる、世界は今よりもう少しよくできるのではないだろうか。

昨今話題になっている、さまざまな企業における品質管理の問題や、隠蔽体質の話題なども、確かに日本の物づくりの危機であるという捉え方もできるが、もう一歩踏み込んで、日本の大切な「おとな社会」という文化の危機という観点から見つめてみる必要がある。